

①材料準備

- ア.2人1組で藁を木槌等で叩く。（柔らかくする（特に根本と穂先）、余分な部分が取れる→作業場が散らからない）
- イ.打ち手は1か所に打ち下ろし、片方が藁を動かして叩く場所を調整する。
- ウ.打台は出来るだけ平坦なものが望ましい。（凹凸状態では途中で切れることがあるため。）
- エ.柔らかさは全体的に「しなり」が出る程度。
- オ.藁は、「はえぬき」などの一般種でも良いが、「栄作モチ」の方が長く、柔らかく造作しやすいので適している。

②菰（こも）づくり

- ア.藁で作った芯棒を包むためのもので、横幅約 100cm、縦幅約 25cm を編んで 1 枚となる。
- イ.編み台を用いる。
- ウ.藁 3 本程度の根元部を編み台中央に向け、同じく 3 本を逆向きしたものを合わせて 1 回分の網目となる。
- エ.網目は麻糸を巻いた木片を用いて糸を前後交差して作る。木片が重しとなって合わせ目が強く縛られることになる。（中央部横幅 30cm 前後ががっちり（根元と根元が合わさるため）締まっている感じ。）
- オ.網目は 25 回ほどを基準とし、糸は芯棒を包んだ後の結束用として約 5cm を残して切る。

③芯棒づくり

- ア.束ねた藁屑（藁をしごいて出たものなど）中央部を麻縄で結束する。
- イ.1 本で一方を巻き、もう 1 本で残りの片方を巻いてラグビーボール状に成型する。
- ウ.中央部は直径で 15cm 程度、全長で 60cm 程度か。

④しめ縄づくり

- ア.芯棒を菰で包んだもの（部材）を 3 つ作る。（この 3 つを組み合わせたものが注連縄本体となる。）

- イ.部材は芯棒を菰で包み、菰に残された結束用麻糸で中央部 1 か所を結束し、さらに両端近くを別糸で結束したものである。
- ウ.2つの部材を適当にTSコードで仮止めしながら、先ず片方を「反時計回り」により1本にしていく。
- エ.その際、飾る所に合わせるためには、ワラを付け足し「左廻い（ひだりない。右利きの場合、右手が下から上、左手が上から下へ動かしてねじる）」にて伸ばしていき、残り片方も同様に行い長さを調整する。
- オ.合体した部材に残りの部材を「左ねじり」にて合体させ、両端を結び止めした上にさらに麻糸で結束して注連縄本体を形作る。
- カ.左廻いにて藁縄（便宜上、化粧縄という）を編んで2本掛け（正面側の網目が2本とも斜め上向きになるように。裏側の網目は斜め下向きになる）にて、結束部の麻糸が隠れるように本体中央部を下から上に持って行って結束する。
- キ.化粧縄を切った後の最上部は扇型に開くように成形する。
- ク.最後に、ハサミで全体の「はみ出し藁」を切り取って完成させる。

⑤しめ飾りの作り方

一般家庭では、紙垂（かみしで。雷のような形をしている）のみが多いが、古口地区の白山神社、山の神様、稻荷様では、通称“たわし”と呼ばれる藁細工物をしめ縄に下げている。

- ア.長さ 60cm 前後の藁を一掴みし、うち 1～2 本の 20cm 前後の所を麻糸で結束のうえ、中心に入れ戻す。
- イ.結束麻糸2本を手元側に出し、引っ張っても抜けないことを確認したのち、結束部を基点に全ての藁を円形となるよう外側に折り曲げる。
- ウ.折り曲げ部から 5cm ほどのところを麻糸で結束する。
- エ.折り返し部先端に全てを合わせ、余分なところを切って完成させる。



1.藁打ち

藁を細工しやすいように柔らかくする。



2.芯づくり

藁屑などをラクビーボール形状にする。太いと振じりが大変！



3.菰(こも) 編み

芯を包んで縄の部材とする。網目は25編みくらい。



4.縄部材

芯を菰で包んだもの。3組で1セット。



しめ縄は神様を祭るに相応しい神聖な場所であることを表し（*新年の祝いなどのため家の入り口などに張って、悪事が家内に入らないように）、紙垂（かみしで）は神様の降臨を表す。（*以外の出典：AllAbout暮らし）



5.振じり①

部材2組を「左廻い」にて振じる。
※左廻いは反時計回り。



6.振じり②

5で出来たものに残り1組を左廻いで組み上げる。両端は飾る場所に応じて藁を足し、長さを調整する。



8.飾り②

紙垂(雷形)とは別に、乙夜塾では「たわし」を飾る。紙垂は神社から。



7.飾り①

組上がったしめ縄中央部に別の縄を巻く。先端はハサミで扇形に。